

国語教科書にみる

インドの公教育の宗教的要素

澤田 彰 宏

現代インドでは世俗主義が憲法で規定されていて、宗教教育は公立校では禁止されている。そのため公立校の科目には宗教科というものはない。そこで、多宗教国家であるインドで実際にどのような宗教的な事柄が学校で教えられているのかを探るべく、筆者はヒンディー語（北インドにおいて日本の国語科に相当）の新旧二種の教科書を資料として比較・分析した。教科書はインド国立教育研究・訓練協議会（以下NCERT）作成・出版のものである。

ここで新旧の教科書を比較する意義を以下に記すと、社会的背景として二〇〇〇年から四年にかけてNCERTの中等教育用歴史教科書に対し、時のインド人民党（BJP）を中心とする連立政権から内容書き換えへの介入があり、これはインド内外で大きな問題となった。旧版教科書はこの時期に改訂・出版されたものであり、新版は、選挙に敗れたBJP政権が下野し歴史教科書の問題が終結した後に書名も変え新たに出版されたものである。このことから、両者の内容比較により、歴史教科書以外にBJP政権からの介入等の影響があったかどうかについて、検討ができるということである。

まず、旧版教科書 *Bal Bharti*（第一〜五学年を参照）では、

各学年の冒頭で憲法前文、第五一A条のインド国民の基本義務などが掲げられ、第一課ではインドの国土や国旗などを称え生徒の愛国心を喚起するような詩で始められている。第三学年までは祭りや古典文学に取材した課がみられ、第四学年からは祭りに代わりインド各地の遺跡や偉人を題材としたものがみられた。これらの内容では、登場人物の属する宗教には言及せず、一つの祭りを互いに異なる宗教コミュニティのこどもたちが共に祝っていたり、家族がインド各地の名所やジャイナ教遺跡を巡っていたりするなど、一見、インドの宗教それぞれの個別性には触れず、多宗教共生の趣がある。しかし、祝われるのはヒンドゥー教の祭りが多く、各地を巡っている家族もヒンドゥー教徒であるなど、宗教的要素を含む課の全体をみればヒンドゥー教徒中心の視点から教科書が作られているといえる。

新版教科書 *Ranjini*（第一〜三学年を参照）では、第一と二学年では宗教的要素を含むのは、テースーという祭りについて第二学年のある一課の「読み物」が一つあるのみである（宗教名明記なし）。第三学年になると宗教的要素を含む課の数は増えるが、そこでも精霊のような存在が人間にいたずらをす、太陽と月が空にある由来などの物語や、登場人物が本文中で発する一言、あるいは挿絵により登場人物の属するコミュニティがわかるのみの程度であり、宗教的要素の度合いは旧版に比べ弱くなっているといえる。古代インドのサンスクリット説話集である『パンチャタトラ』についての課も第三学年にあるが、ここでもヒンドゥー教とは明記されずその文化的重要性について触れられているだけである。

以上から新旧教科書にみられる宗教的要素の内容について比較してみると、まず旧版教科書では個々の宗教名には言及されず、いくつもの宗教コミュニティから人物が登場している。しかし、祭りや遺跡など具体的な宗教文化を題材とし、また歴史上の偉人や物語の登場人物などはその宗教的属性がわかり、そして、それらはヒンドゥー教中心の視点からの記述である。

一方、新版教科書ではそういった宗教的要素については注意深く避けているように見受けられる。例えば、祭りを取り上げない、神話や説話などに取材したものが減らすなどである。また、そういった要素を含む課教そのものが旧版に比べ減っていることも挙げられる。つまり新版教科書では宗教的要素の度合いが弱くなっているのである。以上のことから、前BJP政権後に作られた新版ヒンディー語教科書は、旧版に比べより非宗教的になり、そのことから旧版教科書には当時のBJP政権のヒンドゥー至上主義的な影響があったと考えられる。

川崎市田島小学校における神道教育事例の

考察——山崎博を中心に——

中道 豪 一

- 一 本発表の強調点
- ・ 田島小における神道教育事例の指摘
- ・ 神道教育における田島小の位置づけ

二 キーワード

山崎博 田島小学校 体験教育 入澤宗壽 文化教育学

三 要旨

本発表は神道教育研究の一環として、大正から昭和にかけて実践された田島小学校（神奈川県川崎市）の教育事例から、神道教育にあたるものを指摘したものである。

舞台となる田島小は、ドイツ文化教育学に基づく体験教育を実践した学校として教育史に名を馳せている。その実践は全国的な注目を浴び、最盛期には全国から見学者が押しかけ、ついには參觀停止にまで至るほどであり、世界新教育会議では二度もその取り組みが発表されている。「体験により体験にまでの教育」を旗に掲げた実践は田島体験小学校とまで呼ばれるまでになった。

こうした実践は東京帝国大学の入澤宗壽と、田島小校長である山崎博によつて運営された。文化教育学の研究者であり、実践志向の強かった入澤と、教育改善を熱望する山崎の意図が重なり合い実現した実践は、『日本田島に於ける新教育の実際』『我が校の体験教育』などの書物にまとめられ、現在に伝えられている。入澤については「入澤宗壽の神道教育」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四五号、平成二〇）で考察を為した。

田島小の特色は、文化価値の体験を通して、新たな文化を創造していける人材の育成にあった。現実的な実践を組織する際、必然的に日本という風土を意識した人間教育が計画され、その中に神道が姿を現すのである。ここに神道教育の事例研究としての意義がある。